

花火師の森

寺山 権

学校の裏山から、花火が上がった。

硝子窓に映る僕の顔に、赤と青の光が交錯し、瞬く間に夕闇へ散っていく。

誰もいない放課後の教室には、僕一人だけが取り残されていた。

机も椅子も壁の掲示物も、すべてが影のように沈黙している。

今夜、夏祭りの予定はないはずだ。町内放送も静まり返っている。

靴の片方は、まだどこかに隠れたままだった。

僕は裸足のまま裏山へと駆け出した。

ざわめく木々が僕を手招きしている。

足裏に絡みつく土の湿り気も、草のざらつきも、不思議と気にならなかつた。

山道の奥からは、鉄を叩くような音が響いていた。

カン、カンと、晩夏の空気を裂く規則正しい音。

誰かが火薬を詰めているのだろうか。

その音に導かれるように、僕は奥へ奥へと足を進めた。

やがて、月明かりの下にひとつ影が浮かび上がつた。

痩せ細った背中が、音に合わせてゆっくりと動いている。

振り返ったその顔は闇に紛れていて、よく見えない。ただ、流木のように刻まれた深い皺

だけが、やけにくつきりと浮かんでいた。

僕の脚は竦み、その場に根を下ろした。

先ほどまでの好奇心は、静かに息を潜めている。

「……消したい感情はあるか」

しわがれた、どこか無機質な声が闇を震わせた。

僕は一瞬、答えを飲み込んだ。誰にも言えない胸の底に閉じ込めていた感情が、すぐに思
い浮かんだ。

教室の扉をくぐるたび、心臓が縮み、背中が丸まり、吐き気が込み上げる、あの感覚だ。
「……教室に、入りたくないんです」

口にした途端、全身が冷たい刃物でなぞられたように震えた。

「『恐怖』か。なるほど」

花火師は唐突に、僕の胸に手をかざした。

氷を飲み込んだような冷気が広がり、身体の奥から何かが引き剥がされる。

第22回坊っちゃん文学賞 佳作 「花火師の森」 寺山 横

掌の上に現れたのは、深い青を宿した玉だった。

それは闇の中でどくどくと脈打ち、まるで僕自身の心臓が外へ零れ落ちてしまつたかのようだった。

花火師はそれを火薬と素早く混ぜ合わせる。

次の瞬間、夜空に青い花が咲いた。光片が弾け、空いっぱいに散る。どん、と遅れて響いた轟音が胸に打ち込まれた。

「見事な色だな」

その声は、先ほどより少し張りがあった気がした。僕は頷いた。恐怖は確かに僕の中から消えていた。

不気味だった森の闇も、目の前の人影も、不思議と心地よく思えた。生ぬるい土が、僕の足裏に纏わりついている。

翌日、僕は教室で突き飛ばされた。

いつもなら目を伏せてやり過ごすところだ。けれどその瞬間、身体の内側から火の粉のようなものが舞い上がった。

——怒り。

恐怖を失った僕の中で、それが初めてかたちを現した。

周囲は見てみぬふりをするだけだった。誰も助けてはくれない世界では、消してしまった方が楽な感情があるのだと、僕はこの時知ってしまった。

初めて突き返した。力の限り蹴り飛ばした。

相手が怯んだとき、思わず笑みがこぼれた。

ふと、窓の外に目をやる。昨夜の青がまだ臉に焼きついている。

僕は初めて、自分の意思で立っている気がした。

それ以来、僕は花火師の手伝いをするようになった。

花火師は感情を集める仕事をしていた。

怒り、憎しみ、嫉妬、後悔。

森のあちこちに転がる感情は、誰かの心からこぼれ落ちた残骸だった。

僕はそれを拾い集め、花火師のもとへ運んだ。落とし物として優秀だった。

火薬と混ぜ、打ち上げられた玉は、どん、と弾けて声に変わる。

笑い声とも、泣き声ともつかない声が、光とともに闇夜を漂つた。

あるとき、玉虫色に輝く玉を見つけた。

掌に乗せると、教室の隅にある古い本の匂い、陽を浴びた布団の匂いが鼻腔をくすぐつた。

花火師は目を細めた。

「……『喜び』だ。珍しい」

どうして明るい感情が落ちているのか、僕にはわからなかつた。

花火師はしばし黙り、手の中の玉を月光に透かした。

「人は苦しみに押しつぶされると、大事なものまで落としてしまう。俺もかつては……」

その先は花火の轟音に呑まれた。

やわらかな光が降り注ぎ、胸の内に一瞬温もりが満ちる。

花火師の皺だらけの顔に、その時だけ不思議なほど穏やかな笑みが浮かんだ。

やがて、僕は恋をした。

初恋だった。

いじめられていた僕に、ただ一人優しくしてくれた少女。

僕は必死だった。

彼女の嫌いな給食の野菜を代わりに食べ、嫌いな虫を退治した。彼女が嫌だと言つた係の仕事も、もちろん代わりにやつた。

僕は嫌いなものを「嫌い」と思う感情が邪魔になつた。消してしまえば、どんなことからも彼女を守ることができる。

「この気持ちを消してほしい。楽になりたいんだ」

花火師が僕の胸に手をかざす。

縁がかった光が夜空で破裂する。

花火師の背筋が、ほんの少し伸びたように感じた。

その瞬間、身体が羽根のように軽くなつた。同時に、何か大切なものを失つてしまつた気がした。ピースの欠けた、完成するはずのないジグソーパズルを解いているようなん……そんな感覚だった。

けれど、きっとこれでよかつたのだ。

それから僕は、彼女のために多くの感情を手放した。

怒りも、嫉妬も。悲しみも。恋心が深くなることに、ゆっくりと、確実に、僕は邪魔な感情を夜空へ打ち上げていった。

感情を失うたび、胸の奥がちくりと痛んだが、僕は見ないふりを続けた。

ロボットのように都合よく動く僕は、彼女にとつて便利な道具だった。

けれど道具から好意を寄せられるのは、きっと迷惑なことだったのだろう。

ある夕暮れ、廊下を歩いていると、教室の中から笑い声が漏れ聞こえてきた。

「ちょっと優しくしたら、何でも言つことを聞くのよ。便利だけど、気味が悪い」

第22回坊っちゃん文学賞 佳作 「花火師の森」 寺山 権

少女の声が、鈴のように転がった。

その響きに、身体中の骨がぎしりと音を立てた。

——なるほど。便利すぎると、気味が悪いのか。

悲しみはもう打ち上げてしまつたはずだった。けれど彼女の言葉はなぜか、僕の心中に冷たい棘を残した。

不意に、自分が傷ついているのだと気がついた。

驚いた。まだこんな風に心が揺れるなんて。

彼女が迷惑に思うのなら、近くにいてはいけない。そのため邪魔なのは、この「好き」という灯火だ。僕はこの火を消したかった。

消せばきっと、遠くからでも花火のように彼女を見守れる——そんな気がした。

僕はすぐに花火師に頼んだ。

あたたかな感触がして、胸から玉が出てくる。

桃色がかつた真珠のような輝きを放つ、美しい玉だった。

白い花が咲き、夜空にほどけて消えた瞬間、僕の胸にぽつかりと穴が開いた気がした。

ふと隣を見ると、光に照らされる花火師の横顔が、僅かに明るんで見えた。

その日から、僕は何も感じなくなつた。

彼女を目にしても、僕の心は静まり返つていた。

好きだった音楽も、ただ空気が振動しているだけになつた。

好きだった本も、ただの紙と文字の羅列になつた。

みんなが笑う輪の中にいても、僕だけ別の世界にいるみたいだつた。

「置物みたい」

誰かにそう言われたとき、背筋に冷たさが走つた。

僕は一体、何がしたかったんだっけ。

このまま人ではなくなつてしまふのだろうか。

そんな焦りでさえも、どこか他人事のようだつた。

日に日に、心が乾いていくのを知るだけだつた。

耐えられず、僕は花火師に叫んだ。

「返してほしい。僕の感情を。これじゃ人じやなくなる」

花火師は、横目でじろりとこちらを見た。

しばらく黙っていたが、やがて口の端を歪めた。

「一度打ち上げたものは戻らない。欲しければ、他人から奪うしかない

炎に照らされた花火師の顔は、出会つたころと少し違つて見えた。

皺は薄れ、声には生気が宿り、瞳には若き日の光が差している。

第22回坊っちゃん文学賞 佳作 「花火師の森」 寺山 権

「お前のおかげで、すべての感情を取り戻した。これでようやく妻のもとへいける」

声は遠くからも近くからも聞こえた。

僕ははつとした。

思い返せば、感情を打ち上げるたび、花火師の声や背筋、表情に、どこか変化があつたよう

うな気がする。

偶然だったのか、それとも……

ただ、僕が何かを失うたびに、彼は満ちていった——その事実だけが、ぼんやりと胸に残つた。

焦げ付いた火薬の匂いとともに、花火師の姿は風に流れ消えていった。

僕は立ち尽くした。

学校の裏山から、花火を打ち上げた。

夜空に広がった光は、花弁ではなく顔の輪郭を描いているように見えた。見知らぬ誰かの顔が、次々と重なり合つては消えていく。

打ち上げた光を、僕はただじっと見つめていた。

心は空っぽのはずだった。

それなのに、身体のどこかに残つていた最後の滴のように、頬に一筋の涙がこぼれた。

なぜ僕は今、泣いているんだろう。

理由はもうわからないけれど、その温かさだけが確かだった。

僕は火をつけた。

ひとつ、またひとつ。

森に満ちるすすり泣く声は、どこかで同じように声を押し殺す誰かの胸にも届くだろうか。

空に咲く花が、僕の夜をそっと照らした。